



『人食いチンパンジー』

作者 大黒達也

一、あらすじ

四人のトップグラビアアイドルが、東アフリカ、タンザニアのジャングル奥深くへとグラビア撮影に向かう。彼女達を待ち受けていたものは、前人未到のジャングルと人食いチンパンジーの群れであった。凶暴な野生のチンパンジーに犯され、生きたまま貪り喰われる美女達。

二、登場人物

桑田エリ

日本のトップグラビアアイドル。百七十センチの身長に、誰もが認める美貌と豊かな乳房と白人女も及ばぬような美しいヒップラインの持ち主

安田美奈

日本のトップグラビアアイドル。身長百六十五センチ。類稀な美貌と高い知能の持ち主。現実主義者であり、男も女も愛せるバイセクシヤル。

桜田真由

日本のトップグラビアアイドル。身長百六十八センチ。知的な美貌と美しいプロポーションの持ち主。性格はおっとりとしている。

香田里奈

日本のトップグラビアアイドル。身長百七十センチ。ハーフを思わせる美貌と美しい肢体の持ち主。性格は、少しオツチヨコチヨイなどころがあるキュートな女性。

アキラ・シンプソン

米国人を父に持つ日系人であり、元海兵隊所属。身長百八十センチ以上の長身で、米国海兵隊で鍛えられた屈強な肉体の持ち主。性格は陽気で、ハンサムの部類に入る。

三、本編

第一章 プロローグ

中央アフリカ東部に位置するタンザニア北部のタングニカ東岸に流入するマラガラシ川を、一隻の長さ三十メートル以上はある豪華クルーズが時速十数キロで航行していた。

船上には小型プールが造られ、超ビキニ姿の若い女達が、黄色い声を発しながら光り輝く水面で水飛沫を上げていた。彼女達の姿をプールサイドからひとりの若い男が、業務用のビデオカメラで撮影していた。

すぐ近くに置かれたテーブルでは、海水パンツ姿の男達二人が、女達の姿に鼻の下を伸ばしながら、冷たく冷やしたビールを大ジョッキで飲んでいた。

ひとりには白髪交じりの長髪で、気障なサングラスをかけた痩せ型の中年男であった。もうひとは、三代前半ぐらいに見え、筋骨逞しく短い黒髪にブルーの瞳を持つ男であった。

「アキラ。どうだ？日本の女は美しいだろう？」

痩せ型の中年男が、黒髪にブルーの瞳を持つ男に話しかけた。

「そうだな。肌がきれいだ。それにスタイルもいいな」
アキラと呼ばれた男は、空になったジョッキをテーブルに置いた。

「何しろトップグラビアアイドルだからな。顔は言うことないし、スタイルも白人女に引けをとらない。どの娘がタイプだ？」

中年男は、アキラという名の男に顔を近付けながら尋ねた。サングラス奥の目が笑っている。

「皆可愛いが、エリが好みだ。加藤さんは誰が好みなの？」

「エリか。彼女は一番の売れ子だよ。俺は美奈が可愛いと思う」

加藤という名の中年男が、サングラスを外し、手の平で強烈な日差しを避けながら、女達の姿を舐めるように見詰めながら言った。

「ねえ。そんなところでヒソヒソ話なんて、い・や・や・ら・し・いわよ」

真っ赤なビキニを身につけたエリが、満面の笑みを浮かべながら、二人に近付いてきた。二人の手を取り、プールの方に引っ張った。ふたりの背後に回った美奈

が、体当たりをかませた。

四人は大きな水飛沫をあげながら、プールに飛び込んだ。四人の男女は強烈な日差しを浴びながら、奇声を発し、大げさに笑い、手足を絡ませた。

「ゲームをしないか？」

水遊びに飽きた加藤がプールから上がった。

「どんなゲーム？」

エリは興味を抱いたようだ。加藤がエリの手を引いてプールから引き上げた。

「アキラ。船長に少しの間、船を止めるように行ってくれ」

五分後、デッキには四人の女達と加藤にアキラが立ち、ゆったりと流れる水面を見詰めていた。加藤がセカンドバックから、一挺の黒光りする拳銃を取り出した。

「三五七パイソんだ。いい銃だよ」

加藤は生粋のガンマニアだった。日本では合法的に所持が不可能な拳銃を渡航の際、密かに入手していた。

「拳銃なんて、違法じゃないの？」

「ここはジャングルのど真ん中だよ。うるさい事言わないの。アキラ、ビール瓶を上流に向けて投げてくれ」

「いいよ」

アキラがビール瓶を三十メートルくらい上流に放り投げた。加藤がパイソン四インチマガナムを構えた。十メートルくらいに近付いたビンに狙いをつけた。耳を劈くような銃声がして、ビンの近くに水飛沫が上がった。

「何だ。当たらないじゃない」

美奈が馬鹿にしたように言った。

「撃つのは初めてなんだ。ハワイに行ったときに機会を逃してね」

「貸しくれ」

アキラがパイソンを借り受け、一瞬狙いを付けて引き金を引いた。水面を漂っていたビンが粉々になった。

「カッコいい！」

エリがアキラの背中に抱きついた。

「私にも撃たせて」

美奈がアキラから銃を借り、両手で構え水面に向け

て引き金を引き絞った。轟音が響き渡り、美奈はその場に尻餅をついた。

「玩具じゃないんだよ」

加藤が美奈からパイソンを取り上げ、抱き起こした。

「ゲームって、どうするの？」

エリが加藤に尋ねた。

「皆で射撃の腕を競うんだ。勝った者は誰でも好きな相手にキスをするんだ。でも止めておくよ。アキラが勝つに決まっている」

「アキラだったら、いつでもキスしちゃうわ」

エリが言ってから、俯いて頬を赤らめた。

「そうだよな。二枚目が羨ましいよ。まったく」

「飲み直しましょうよ」

アキラが加藤の肩を軽く叩いた。

その豪華クルーザーに乗っていたのは、日本のトップグラビアアイドル四人と、有名出版社の社員達に彼らのガイド役を勤める男達であった。

グラビアアイドルのメンバーは、トップアイドルの桑田エリを筆頭に安田美奈、桜田真由、香田里奈の四名

という、そうそうたるメンバーであった。エリは、雪のように白い美肌の持ち主であり、百七十センチの身長に、豊かな乳房と白人女も及ばぬような美しいヒップラインの持ち主であった。

他の四名もエリに劣らぬほどの美貌とスタイルの持ち主だった。

出版社の社員は、企画部長の加藤健太に撮影担当の大杉寮、音声担当の高杉太一、唯一の女性スタッフである前原香織の四名であった。香織は入社一年目の新人で、スタッフ達の雑用係をしていた。度の強い分厚いレンズの黒縁メガネをしていて、化粧気もなく、皆から女扱いはされていなかった。いつも仕事着と言える擦り切れたジーンズにTシャツ姿であり、手足は長くスタイルは良かった。

乗組員は、ロバート・ストーンとアキラ・シンプソンに、現地で雇われた三人のタンザニア人達であった。ロバートが船長兼コックであり、アキラはガイド兼用心棒役であった。

ロバートは、クルーズのオーナーである船舶会社からの派遣スタッフであり、ほとんど口をきかない寡黙な中年男であった。フランス料理の腕は一級品であった。

一方アキラは、米国人を父に持つ日系人であり、元海兵隊所属で銃器の扱いには長けているとのことであった。船舶会社の正社員ではなく、臨時社員として雇われていた。普段は勝手気侷な世界旅行をしているということだ。

身長百八十センチ以上の長身で、米国海兵隊で鍛えられた屈強な肉体を有していた。性格は陽気で、ハンサムの部類に入るであろう。

一行は、ジャングル奥地にある前人未踏の秘境を目指していた。大滝が造る瀑布や密林の中で、フルヌードの撮影を計画していた。業界トップの美女達がフルヌードを披露することは、センサーショナルな話題を呼ぶであろう。

9 最近業績が落ち込んでいる雑誌の大幅な売り上げ増が予想された。そういう訳で彼女達には莫大な報酬

が約束されていた。撮影費用もふんだんに用意された。プール付きの豪華クルーザに高級ワインやキャビア・フオアグラなどの高級食材も荷積みされていた。彼女達には狭いながらも、バストイレ付きの個室が与えられていた。出版社スタッフの居室は一室のみで、狭い室内に男三人が雑魚寝の状態だった。雑用係の香織は操舵室に寝泊りした。

ロバートとアキラは二人で、残りの一室を使い、現地人の乗組員は船上でビニールシートに包まり夜露を凌いだ。

クルーザは、ゆつくりとりした速度でジャングルの奥地へと向かっていた。

川幅は徐々に狭くなっていく。見渡す限り鬱蒼とした熱帯雨林のジャングルばかりだった。

日中、女達はグラビア撮影やプールサイドで豪華な食事を楽しんだ。ガイド兼用心棒役のアキラは必ず、彼女達に呼ばれた。アキラは女達を魅了するだけの引き締まった筋骨逞しい肉体と、彫りの深い整った顔立ちにブルーの瞳を持っていたからだ。

アキラは彼女達に世界中で経験してきたことを、ユ
ーモアを交えながら聞かせた。彼女達は、アキラの巧
みな話術と、容姿にうっとりとした表情で聞き入って
いた。エリは特に熱心だった。彼の隣に座り、むき出
しの逞しい太腿を触ったり、息がかかるほど顔を近付
けたりした。

周りの女達は、時よりふたりの様子を見ながら、困
惑した表情を浮かべた。

二ヶ月間という長期に渡る撮影旅行は、彼女達にと
って退屈極まりないものになってきた。楽しみといえ
ば、たまにアキラが作るイタリア料理や、アキラその
ものだった。アキラにはイタリア料理の才能もあった。
比較的仲が良かった箸の女達に不協和音が響き始
めた。

その夜、エリの部屋に他の女達が訪れた。早速、里
奈が持ってきた三脚を部屋の隅に立て、ビデオカメラ
を取り付けた。

「こんな夜遅くに何の用なの？そのカメラは何？」
エリは女達の只ならぬ様子に、少し怯えていた。

「あんたに話があるのよ」

美奈が、ゆつくりとエリに近付いた。他の三人も美奈に続いた。

「何よ。そんなに怖い顔をして」

エリは、バスローブの胸元を手で掴んだ。肩が僅かに震えている。

「あんだ。アキラと寝たでしょう？」

美奈は冷たい笑みを浮かべながら、エリの瞳を覗き込んできた。

「美奈ちゃん。何言っているの。そんな訳ないじゃない！」

「独り占めにするつもりね」

「だから、何でもないんだって！」

いつの間にか、三人の女達がエリの回りを取り囲んでいた。

「白状しないと痛い目を見るわよ」

「……」

「あんだ。女に犯られたことは無いでしょう？」

美奈がエリの腰を両手で押さえ込むようにして、顔を近付けた。

「何言っているの？」

エリは顔を背けた。

「女にはね。女の弱点が痛いほどわかるのよ。どこが感じるかね？」

美奈の手が、バスローブ越しにエリの尻を撫で回した。様子を見ていた女達の顔に薄笑いが浮かんでいた。

「出て行って……」

叫びだそうとするエリの口に美奈が手を当てた。

「何怖がっているのよ。初めてじゃないんでしょ？ 私ね。本当は男より女の方が好きなのよ。随分前からアンタを狙っていたんだ。それにこつちにはカメラもあるんだ。一部始終を録画してあげるね。口封じのためだよ」

美奈は、エリの頬を舐めながら、バスローブの隙間から手を差し込んで、豊かな乳房を鷲掴みにした。

「……」

エリは嗚咽に咽びながらも、美奈から逃れようともがきだした。

「ベッドの寝かせるのを手伝ってちょうだい」

周りで見ていた女達に命令した。何本もの手がエリ

の身体に纏わり付いた。次の瞬間エリはベッドの上に仰向けの姿勢で横たえられていた。

「真由。エリの口をタオルで縛って。里奈は両手を押さえていてね」

女達が一斉に動き出した。大勢に押さえつけられては、為す術がなかった。

「さあ、ご開帳の時間よ。たつぷりと楽しませてあげるわね」

美奈は上擦った声で言いながら、ベッドの上で大字に押さえつけられているエリのバスローブに手をかけた。次の瞬間、雪のように白くシミひとつない裸体が露にされた。寝ていても崩れない乳房にヒップラインがこの世のものとは思えぬほどに美しかった。生唾を吞込む音が周りから聞こえてきた。

「あら、きれいな身体ね。女の私が見ても惚れ惚れするくらいよ」

美奈の欲情に濡れた視線が、乳房から柔らかかそうな腹部へと移動し、最後には股間の陰影に釘付けとなった。股を大きく割られているので、サーモンピンク色の割目がむき出しにされていた。

美奈は、おもむろに乳房に喰い付き音を立てて吸った。エリの大きな瞳から大粒の涙が流れ落ちた。暫く乳房を舐め回した後で、柔らかい腹部を甘噛みしてみた。エリの股の間に座り、両手で乳首を触りながら、ゆつくりと下腹部に顔を押し当て、クリトリスに吸い付き、舌先で舐め回した。エリの裸身がビクンと揺れ動いた。

「もう感じているのね？お姉さんがもってよくしてあげるわよ。うつ伏せにするのを手伝って」

周りの女達が一斉に動き、エリの裸身をひっくり返した。盛り上がった白くてむき卵のような尻が皆の視線を貫いた。生唾を吞込む音が聞こえた。

「真由ちゃん。貴女、他人のアヌスを見たことはある？」

美奈は隣で、エリの尻を食い入るように見詰めていた真由に尋ねた。

「いいえ。無いわ」

上擦った真由の声が聞こえてきた。

「舐めてみる？」

「……」

真由は少しの間、美奈の方を見詰め、それからゆつくりと大きく頷いた。

「エリ。聞いたでしょう？真由ちゃんが、お前のアヌスを舐めてくれるんだって」

それを聞いたエリの裸身が、動き出そうとしてもがいた。手足を女達に掴まれているので、身動きは取れない。タオルで塞がれた口から、嗚咽が漏れていた。真由の瞳が淫らな光を帯び始めた。目の前の豊かな白い尻の両手を添え、左右に押し開いた。きれいなサーモンピンク色のアヌスが割目の底に見えた。

「匂いを嗅いでみて」

美奈は徹底的にエリを甚振るつもりだ。

「いいわよ」

真由は尻の割目に顔を入れ、目を閉じて大きく息を吸い込んだ。白く盛り上がった尻がブルブルと震え、嗚咽が激しくなった。少しの間、アヌスの匂いを嗅ぎ続けた。顔を上げうっとりとした表情を浮かべた。

「どうだった。ウンチ臭かった？」

美奈が、淫らな笑みを浮かべながら、尋ねた。

「いいえ。石鹸のいい匂いがしたわよ。今度は舐めて

みるね」

真由は期待に胸を時めかせながら、エリのアヌスに口をつけた。エリの白い背筋が仰け反った。女達に押し殺したような笑いが広がっていく。真由はエリの尻を押しさえつけないながら、激しい勢いでアヌスを吸い、舌を挿し込もうとした。

その後、女達による陵辱は朝まで延々と続けられた。エリは何度も逝かされ、最後には意識を失った。女達はそれでもエリを開放することは無かった。

人形のようなエリの膺やアヌスや乳房を舐め続けた。

翌朝、女達は、皆ビキニ姿になりデツキのプールサイドで遅い食事をとっていた。美奈はエリの隣に座り、時折、口移しでパンやサラダを食べさせていた。

「今夜も犯る？」

里奈が期待に目を輝かせて美奈の顔を見た。

17 「もちろんよ。旅の間も日本に帰ってからも、好きな時に犯してやるわ。こっちにはテープがあるんだか

ら」

美奈は蒼白な顔をして押し黙っているエリの太腿を驚掴みにした。

「女の人の身体があんなにいいとは思わなかったわ。私戻れなくなっちゃう」

真由が屈託の無い笑顔を浮かべながらミニトマトを口に入れた。

「あのさ。今夜浣腸を試してみない？」

里奈が爪先をエリの股間に押し付けながら、皆の顔を見回した。エリは俯き肩を震わせていた。

「何、言ってるのよ。食事時よ」

「だって、言うじゃない。あれの姿を見られたら完全に言うなりよ」

「奴隷って言うわけ？いいわね。浣腸した後で、極太のペニバンでアヌスを犯してやろうか」

「そいでさ。一部始終を撮影して、あたし達に逆らったらネットに流すのはどうかな。この女、日本にいられなくなるね」

「ネットは世界中に公開されているのよ。死ぬしかないわね」

女達は、エリの肉体はおろか、精神まで食ろうとしていた。テーブルの下では両側から美奈と真由が、エリの膾やアヌスに指を入れ、中をかき回していた。

「お日様の下で食事は美味しいだろう？お嬢さん達」
アキラが満面の笑みを浮かべてやってきた。

「そうね。大自然に囲まれて、最高の気分よ」

美奈は、周囲に広がるタンザニアの深いジャングルを見渡した。川幅は大分狭くなっていた。三十メートルといったところだ。

「エリちゃんは、どうしたの？顔色がすぐれないな」
アキラはエリの近くに立ち、横顔を見詰めた。エリは、力の無い笑顔を返した。

「長旅の疲れが出たのよ」

美奈が代わりに答えた。

「船旅は後、数時間で終わるよ」

「えっ。そうなの？確か予定では後、目的地まで二日ぐらいかかる筈だったけど」

美奈はアキラの顔を見詰めた。

19 「予定が変わったんだ。こっちの方も秘境中の秘境さ。数十メートルの落差がある瀑布や大密林地帯が広が

っている」

アキラは何となく浮かぬ表情で答えた。

「何か問題でもあるの？」

美奈はアキラの表情を見逃さなかった。

「不安と言うほどでも無いが。そこはチンパンジーの生息地域なんだ」

「チンパンジーですって！動物園で芸をするのをよく見たよ」

里奈が会話に割り込んできた。

「芸をするのは、子供のチンパンジーさ。成獣にはとても凶暴な奴もいる」

「だって。こつちには銃もあるんでしょう？貴方が付いているし」

真由が不安げな表情を浮かべながら、会話に加わってきた。

「そうだな。何も心配することは無い。俺が君達を守る」

アキラは吸い込まれそうな満面の笑みを浮かべた。

「そうと決まったら、下船準備をしなくちゃ。行きましよう」

美奈がエリの手をとり立ち上がった。

女達はエリを取り囲むようにして、船室に向かって歩いていく。アキラは彼女達の後姿を食い入るように見詰めていた。ビキニからはみ出た尻が悩ましげに揺れ動いている。アキラは視線を外し、雲ひとつ無い澄み渡った青空を見上げた。大きな深呼吸をしてから、深い溜息をついた。

エリの部屋では、ベッドに全裸のエリがうつ伏せに寝かされ、美奈が深い尻の割目に顔を入れてアヌスを舐っていた。エリは枕に顔を沈め、咽び泣いていた。

「美奈ちゃんも好きだね」

すぐ近くで真由が、覗き込むようにして見ていた。「だって、もう時間が無いのよ。真由ちゃんだって、エリがウンチをするとこ見たいでしょう？」

美奈が愛液に塗れた顔を上げた。

「見たいわよ。でも浣腸器なんて、持っているわけ？」
「大丈夫よ。エリ。ぼさつとしてないで立つんだよ」

四人の女達は、バスルームに移動した。美奈は空のバスタブにエリの上半身を落としこんだ。エリは茫然

自失という状況で為すがままであった。盛り上がった白い尻が、女達の視線を釘付けにした。薄いチョコレートグレイ色のアヌスが見えた。美しいアヌスの周囲は無毛で、柔らかな恥毛が生えているヴァギナへと続いていた。再び、美奈がアヌスに口を付けて、舐り始めた。暫くそうしていた。

「ねえ、浣腸はまだなの？」

他の女達は痺れを切らしていた。

「浣腸するには、ここを十分に濡らさなくちゃね。もういいようね」

美奈が愛液に塗れた顔を上げ、淫らな笑みを浮かべた。

「里奈ちゃん。カメラの準備は大丈夫？」

「いつでもOKよ」

里奈は、カメラをエリの盛り上がった白い尻に向けた。

美奈は、シャワーのホースを手に取り、ヘツドの部分を外した。蛇口を回し湯の温度を調整してから、ホースの先をアヌスに捻じ込んだ。

それまで、じっとしていたエリの背筋が仰け反った。

「嫌！そんなことしないで」

絶叫し泣き喚いた。バスルームのドアは閉められていたの、外に悲鳴は漏れない。

美奈は少しの間、アヌスに湯を注ぎこんだ。ホースとアヌスの隙間から湯が溢れ出したのを見て、ホースを抜くと排泄物が勢いよく噴出した。

「グラビアアイドルの浣腸シーンよ！」

「臭くない？」

「こんなきれいな顔していても、ウンチは臭いと言うことよ」

バスルーム内に女達の黄色い声が響き渡った。ホースによる浣腸は、排泄物が無くなるまで続けられた。女達は交代でエリのアヌスをホースと湯で犯し続けた。最後には、ベッドルームに戻り、寄って集ってペニスバンドでアヌスを貫いた。茫然自失のエリは、為すがままの状態だった。女達は残忍な笑みを浮かべながら、人形のような白い肉体を犯した。部屋には、女達の笑いに混じり、エリの尻に腰を打ち付ける音が響き、愛液の隠微な匂いが充満していた。

第二章 秘境

第三章 森の悪魔

第四章 裏切り

第五章 密林の性交奴隷

第六章 人食いジャングル

第七章 エピローグ

完